

広報 2018

ちの Chino City



平成30年 No.893

11月号





特集「こて絵」 蔵に描かれた伝統と文化

茅野市内にある蔵を見ると、屋根の切り妻の下の壁に絵が描かれた蔵を見つけることができます。その絵は蔵の持ち主や左官職人の様々な思いが形になったもの。蔵の減少が著しい今、茅野市に残る文化「こて絵」を見つめます。

笹原地区や糸萱地区の蔵を眺めると、絵が描かれた蔵を多く見ることができま
す。それは「こて絵」とい
います。漆喰しつくいを用いて作ら
れた絵で、左官職人が使用
する鋺こてを使って仕上げるこ
とからその名が付きまし
た。

こて絵は、蔵を作った際
に、左官職人が施主にお礼
として縁起物を描いて送つ
たとされています。絵柄は、
大黒、恵比寿、鶴、亀、龍
鷹等々、多種多様で、様々
な祈りや願いが込められて
いるといえます。

近年、こて絵を貴重な文
化財として研究する機運が
高まり、市外からも興味を
持った人が来るようになり
ました。笹原地区では、こ
て絵を見て巡る企画(写真)
も行われており、注目され
始めました。そんな茅野市
に残る貴重な文化の一部を
紹介します。



大黒。美しい色のまま残されています。

(笹原地区)



龍の絵。立体的に描かれています。
(笹原地区)

茅野市内には様々なこて絵があります。それらのこて絵をいくつか紹介します。

さまざまなこて絵の紹介

蔵に添えられた絵

姿も思いも絵の数だけ

昔ながらの佇まいが残る笹原集落。ほとんどの家に蔵があり、板倉や土蔵と様々な紋様のこて絵が見られます。くらの持ち主はどのようにこて絵を見つめているのでしょうか。笹原集落の皆さんからお話を聞きました。



▲中島剛司さん・伴子さん夫妻と猫の鏝絵

猫好きへプレゼント 縁起物の鼠とともに

笹原公民館のすぐ近くにとても珍しい猫のこて絵が描かれた蔵があります。中島剛司さん・伴子さん夫妻の蔵です。蔵に漆喰壁を塗る際に、伴子さんが猫好きであったことから、それを知った左官屋さんがつけてくれたのだといいます。よくみると猫の横にねずみがあります。ねずみは縁起ものであり、きつと左官屋さんが縁起物ということで書いてくれたんだと思うと話してくださいました。

こて絵と過ごして

50年今でも新たな発見が

笹原地区に住む吉江生子さんの蔵には恵比寿様、虎うさぎなど、四方向にこて絵が描かれています。米作りをしていた義父母が、米を守るために板蔵に漆喰壁をつけた際に描かれたものだとはいいます。

できた当時のことはほとんど覚えてなく、気づいたらそこにあつたと言いま



1. 蔵の持ち主である吉江生子さん
2. 恵比寿様が鯛を釣る様子が描かれたこて絵。この絵の釣り糸は本物の糸です。
3. 虎が描かれたこて絵。干支が虎の時の御柱年に描かれたものだそうです。



す。最近見学に来た人から、恵比寿様のこて絵の竿紐が本物の紐だと言われて、驚いたそうです。漆喰自体に色がついているので、50年程経つた今でも絵の色は落ちていません。



大黒。笹原地区の絵とは同じ大黒でも色味が違います。
(鑄物師屋地区)



うさぎが飛び回る様子が描かれています。
(笹原地区)



鶴。頭や翼が立体的で今にも飛び出しそうです。
(糸萱地区)

伝え、思う。 伝えた人、描く人、残す人

こて絵の文化を伝えた人、描く人、写真に残した人。それぞれの行動がこて絵の文化を繋いできました。そして今もこて絵の文化を残そうとしている人たちがいます。この貴重な文化を、これからも紡ぎたい—そんな共通の思いが感じられます。

こて絵の文化を広げた 小川天香さん

こて絵の歴史は江戸時代に遡ります。伊豆生まれの入江長八さんという人物が、鋺で描く絵を芸術の域まで開花させました。

長八さんに憧れて、その高い技術を学ぶために茅野市横内出身の小川天香さん（雅号・本名善弥）は上京、長八さん亡きあとの高弟今泉善吉さんに師事し、東京の帝国劇場の壁画、京都では京都七条駅の御便殿の装飾に携わりながら腕を磨きました。

そして習得したこて絵の技術を持ち帰り、諏訪地域の人々に教えたとされています。冬場には、自

宅の裏庭に設けた仕事場（アトリエ）に左官職人を集めて、講習会を行っていました。集められた左官職人は、競ってその技術を学びました。

小川天香さんという優れた先覚者がいたこと、そして左官職人が蔵の施主へお礼の印としてこて絵を送る習慣が根付いたこと、この二つが要因で茅野市内の多くの蔵にこて絵が描かれたのだと考えられています。

現在、天香さんの作品は、茅野駅前にある「天香館」で見ることができます。こて絵に興味がある方、高校生や大学生も足を運んでいるとのこと。



小川天香さん(写真左)と天香さんと親交の深かった俳人 小平雪人さん(写真真ん中)と篆刻家 浜源吉さん(写真右)



魚藍観音（茅野市美術館蔵）
小川天香作

上諏訪温泉浜の湯にあったが工事に
より殷され、その後、復元されました。
現在は天香館に飾られています。



天香館（茅野駅前）

市内で最も若い描ける職人
こて絵・蔵の将来をどう思う

「絶やさないのが一番、気持ちとしては絶やしたくない、でもなかなか難しいでしょうね。」と下平悟さんは言います。

下平さんは、茅野市玉川在住で、親方であるお父さんの影響で18歳から左官職人一筋でやっています。こて絵を始めたのは10年くらい前のことで、大黒をつけてほしいと依頼された仕事がありました、その当時はこて絵はできませんでした。そこで、同じく左官職人の

矢沢正利さん（茅野市本町）にお願いして、教わりながら覚えたのがきっかけだそうです。

大蔵ができる左官は、ほとんどこて絵もできるそうですが、大蔵までできる職人は減っています。

「蔵を壊す人は多いけど、新し



下平 悟 さん



下平さんがこて絵を描いている様子
漆喰で盛った後の色をつける作業

く作る人はほとんどいないですね。残そうとする人も少なくなり、職人も減っている。このままでは先が細っていく一方です。左官職人としての仕事があり、それと共に絵の技術を教えることは難しいといえます。

最近では、こて絵めぐりに参加した別荘の方に家の前につける絵を作ってほしいと頼まれたこともあるそうです。少しでも漆喰の彫刻であるこて絵が残ることを願いながら、依頼があると大きいものから小さいものまで下平さんは描かれています。

こて絵の写真保存に熱意
病気を持ちながらも残した記録

兵庫県出身の芦田吉美さんは、こて絵の写真保存に熱心に取り組まれた方です。東京で働いていましたが涼しい場所を求めて茅野市に引っ越してきました。

定年を迎え、何をしようかと考えているところで奥さんの「こて絵があるじゃない」との言葉からこて絵の写真撮影を始めました。写真を撮るために、こて絵のある家を一日に2件ほど回ったといいます。その写真の一枚が写真コンテストで賞をもらっています。そしてこて絵の記録を本にまとめました。現在、芦田さんが撮影した写真は八ヶ岳総合博物館に寄贈され、貴重な資料として保管されています。

その活動の最中に小川天香さん



芦田 吉美 さん



芦田さんが撮影した写真をまとめた本

のことを知り、孫である善弘さんと出会いました。芦田さんは、善弘さんに熱心に天香の作品を見せてほしいとお願いしました。このことがきっかけで善弘さんは、天香館を作り、興味のある人に天香さんの作品を見てもらおうと思っただけです。

芦田さんは、病気を患いながらも、こて絵の活動を行ってきました。残念ながら病気の悪化により亡くなりましたが、こて絵に関わる方たちに大きな影響を与えました。